

万葉の川心

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

十市皇女とそちのひめみこの、伊勢の神宮に参赴まゐもむきし時に、波多はたの横山の巖いを見て吹黄刀ふきのとじ自とじの作つくれる歌
(巻第一 一二三番歌)

河への上うへのゆつ岩群いはむらに草生くさむさず

常つねにもがもな常処女とこをとめにて

不変ふへんに、ずっと。永遠とこよみの乙女おとめ。本当に時折ときとき、そんな言葉の似合う人に会うことがある。しわもあり、人生の年輪も重ねつつ、なお、少女おとめのような人。幼いではなくて、かわいい人。見た目もきれいだけれど、性格もある。むしろ、生き方かもしれない。そう言われたら、誰をイメージするだろうか。きつと、思い浮かべるのはそう難しくもないと思う。でも、なるのはなかなか難しいのだと、電車の席でお化粧を施す向かい側の乙女おとめを、見るとはなしに眺めつつ、心の中で一人思う。

「川のほとりの神聖な岩々には昔も生えていない。あのように、いつも変わらず、永遠に若々しいままでありますように。永遠の少女として。」この歌は、天武四年二月、十市皇女とそちのひめみこと阿閉皇女あへのひめみこが伊勢神宮に参拝する際に同行した吹黄刀ふきのとじ自とじによって詠まれた。阿閉皇女を念頭に作ったとも、十市の寿を祈って歌を詠んだともいわれている。十市皇女は、大海人皇子と額田王との間に生まれた子である。その後、額田王は中大兄皇子の後宮となる。妻争いは珍しいことではない。中大兄皇子もまた、妻争いに敗れた経験を持つと



いう。みずみずしい十四歳の阿閉皇女と、歴史に翻弄された齢三十の十市皇女。二人の幸せを思いつつ、吹黄刀自は老いゆく自分をふり返り、願いを込めて歌ったのかもしれない。誰もが思う、美しいまま、若いまま年を取りたい。川のほとりで何十年何百年もそこにいながら、美しく神聖な岩々の景色。不変なものなど何もないと分かっているからこそ憧れる。そうありたいと願う心は昔も今も変わらないのだろう。写真の川は、三重県一志郡一志町を流れる波瀬川である。波多神社が波瀬川沿いにあり、この辺りの川岸に神聖視された岩座があったといわれているが、諸説ある。

先日、心の専門家に聞いた話を、ふと思い出した。

「私の深呼吸は、吸ってから吐くものではありません。まず、十分に吐いて空っぽにしてから、口を開けて飛び込んできただけの空気を吸う。最初にゆっくり吐いて、自然に吸うと体の中にためた悪いものが自然に出ていきますよ。」悪いものの上からきれいなものをいくら吸い込んでも変わらないという。まず、出しきることが大切で、怒った時、緊張した時、これを繰り返すと心は落ち着いていくそう。美しくあることは、上から塗り重ねてできるのではなく、淀んだものを流してしまふことにあるのかもしれない。体も心も洗濯できたら・・・せめて今日はお風呂にゆっくり入ろうと決めて、目を閉じた。